

「いとけない少年兵」の入水

——戦争体験と詩作——

平岡 敏夫

先日、平林敏彦詩集『ツイゴイネルワイゼンの水邊』（2014・7、思潮社）の出版記念会に出席した。受付でいきなり平林さん本人に紙片を渡され、何か言葉をと依頼された。一度日本現代詩人会で挨拶中の平林さんを遠望し、お話したくて探して見つからなかったことはあるが、はじめてお目にかかったようなものだった。渡された紙片には、安藤元雄、新藤涼子、井川博年とはじまり、井川さんの乾盃、以下酒井佐忠、三浦雅士、野村喜和夫と続き、計11名の名前があった。私は後から3番目だった。

安藤さんは90歳の平林さんが80歳の自分にとってはおそろしい存在だと言いつつ、この詩集の中に、結ばれた手がほけていく、闇に流れていくといった詩句があり、東日本震災をこのような形でうたった詩はなかったといった意味のことを話していた。このことを今も記憶しているのは、平林さんの詩集の一ヶ月後に刊行した自身の詩集『月の海』（思潮社）の表題の詩も、石巻の大川小学校児童74名が津波で流されて行った事実から発しているからだだが、それにしても平林さんは何故私を指名したのだろうか。

五年前の『蒼空』（2009、思潮社）への返信で、平林さんは「私の敗戦の日は二十一歳の下級兵士でした。同世代はもはや大半鬼籍の人になりましたが、今は風化しきれない戦争の影を詩の中にとど

めたいと思うばかりです」と書いている。日頃軍隊について、私が話したりしている井川博年さんが親しい平林さんにも話し、平林さんと私をつなぐものが軍隊にいたことからくる戦争体験だと思うようになった。陸軍体験にもとづく独自の親しみから、平林さんは私にも一言頼むということになったのではないか。

文目もわかぬ空の闇

一群の兵士たちに明日はなく

砂地によろめいて蛸壺のごとき穴を掘る

細縁眼鏡の神は天上にいたが

兵の命はひとしく鴻毛より軽い

海に氷雨が降りはじめ

とつぜん脱獄をはかるように

姿を消したあのいとけない少年兵は

いつどこで入水したのか

死体は朝の海岸に打ちあげられた

（「冥い海」第3連）

続く連には「すでに子持ちだという温厚な補充兵が／厠で首をくくっていた」という詩句もあり、右の詩篇が軍隊にあつての戦争体験者でなくてはとうてい書けぬものであることは明らかだ。三浦雅

士さんは葉で、日本の古典と響き合うこの手法を平林は戦争体験を内面化する過程で編み出したと言います。「冥い海」は複式夢幻能がそのまま描写されているようなものと記しているが、右の戦争体験を内面化した詩で、私がこだわったのは「いとけない少年兵」の入水だった。

会場には80名近くも詩人たちがいたと思うが、軍隊にいた戦争体験を持つのは90歳の平林さんと84歳の私だけだったろう。満14歳になつたばかりで陸軍に入った私は、少年兵、少年兵とよくいうが、陸軍生徒は下士官の待遇であり、夏季休暇で駅に降りると待合室のベンチで家族と何かを食べていた二等兵、一等兵、上等兵は一斉に起立して14歳の私に敬礼した（『蒼空』の「丸亀駅」参照）。その中に平林さんがいてもおかしくなかったなどとも語った。殴られたのは一年半の陸軍生活で一度しかないとも言ったが、会場は白けたのではない。話題になっていた鮎川信夫の「死んだ男」の話につなげて退散したが、私の言いたかったのは、「いとけない少年兵」というたう平林さんの軍隊（戦争）犠牲者への美しいレクイエムにひかれつつも、少年兵はたんに同情されるべき犠牲者ではない、下士官待遇云々と発言したのは、毅然とした誇りある存在なのだという自己主張だということにあった。

昭和九年から発する陸軍少年飛行兵は、20期を数え、私は18期、特攻を含めて15期まで、四千五百名ほどの戦死者を出している。17歳もいたという。たしかに「いとけない少年兵」たちであり、かわいそうにと同情されるのは当然かもしれないけれども、各人は少年ながら毅然として人間としての誇りは抱いていたと思う。生き延び

ている私の存在理由でもある。

両手で小枝の両側をしつかり握り、
唇を小さく噛んで、静かな海を流れて行きました。

両手で葉の両側をしつかり握み、

唇を固く閉じて、滑らかな海を流れて行きました。

（『月の海』第1連、第2連の各後半）

何の役にも立たぬ小枝や葉つばをしつかりと握り握み、唇を小さく噛み、唇を固く閉じてとうたったのは、この毅然、誇りと関わりがある。「いとけない」子供ながらも運命と共に人間としての存在の主張を最後まで持っていたのである。平易化すれば「いとけない」を「けなげな」に替えるほどのものかも知れぬが、戦争体験と詩作にこのような思いが込められていることを一言したかったのである。